

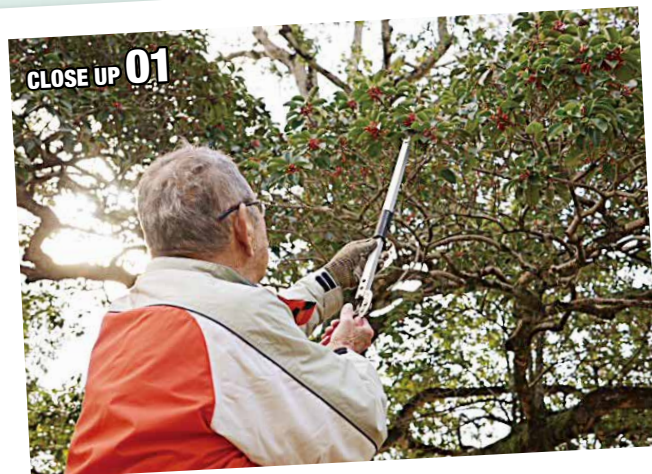
ふゆもみじ／晩秋の華やかな紅葉とは異なり、冬になっても枝に残っている紅葉の葉を指す。周囲が枯れていく中で、数少なく、より濃く、透き通るように残った紅葉や、冬になってから色が際立つ庭園や寺社の紅葉を表現する言葉。時雨や霜に当たると、さらに色を増して真っ赤になることもある。

らしく

自分らしく、
粋なくらし

CLOSE UP

被爆80年 ヒロシマの記憶 未来へつなぐ メッセージ



CLOSE UP 01

グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ
80年の時を超え生きのびた被爆樹木
種と苗木を世界各国へ送り平和を発信



CLOSE UP 02

特定非営利活動法人HPS国際ボランティア
祈る平和から創る平和へ
次世代とともに紡ぐ継承の日々



CLOSE UP 03

ひろしま音読の会
被爆の惨状を綴った原爆詩や体験記を
声に出して伝え“ヒロシマ”を紡ぐ



80年の時を超え生きのびた被爆樹木種と苗木を世界各国へ送り平和を発信

東南ロータリークラブ被爆樹木絵画コンテスト表彰式(令和6年)
樹木医の堀口力先生(左)、共同代表の渡部朋子さん(左から三番目)

CLOSE UP 被爆80年 ヒロシマの記憶 未来へつなぐメッセージ

被爆80年を迎えた日本、その記憶は薄れつつあります。被爆地広島だからこそできる、次世代につなぐためにさまざまな活動をしている団体を紹介します。

グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ

https://glh.unitar.org/?trk=public_post-text



さまざまな人の協力でハードルを乗り越え被爆樹木の存在と意味を世界中に伝える

広島県の爆心地から半径2km以内にある、原爆を生きのびた被爆樹木は、55カ所に159本が現存しています。この被爆樹木の種と、種から育てた苗木を、世界各国に送る活動をしているのが



▲ コーディネーター ナスリーン・アジミさん

「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ」です。コーディネーターとして活動しているのは、ナスリーン・アジミさんです。

「平成15年、広島県が国連機関の誘致に動き、UNITAR広島事務所の開設が決まりました。当時私は、UNITARニューヨーク事務所の所長で

でしたが、被爆地広島での活動に興味を持ち、初代所長として赴任しました。以後20年近く広島で過ごしてきました」と語るナスリーンさん。

イラン生まれの、スイス国籍で、広島に来るまでは長年アメリカで生活してきたナスリーンさんは、広島で生活する中で、被爆樹木の存在を知り、伝える意味を感じました。そしてNPO法人ANT-Hiroshima理事長渡部朋子さんと意気投合。平成23年に、被爆樹木の存在と意味を世界中に伝えようと「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ」を共同で創設するに至りました。事務局はUNITAR広島事務所内に置いています。

「当初、被爆樹木の種や苗木を海外に送ることは、検疫等の関係でハードルが高く、困難を極めました。しかし、被爆樹木の存在と意味を世界中に広げ、その一本一本がつながっていくことで、いずれはオーケストラのように、世界に平和を奏でる象徴になってほしいとの願いを実現するために、関連する行政機関、広島市植物公園、樹木医の堀口力さんなど多くの人の協力を仰ぎシステ



▲ ボランティアも参加した被爆樹木の種取りの様子(令和6年)

ムを構築し、世界各国に苗木を送ることができるようになりました」。

たくしましく生き続ける被爆樹木は世界に平和を訴え続ける象徴

発足から14年経った今は、4つの目標を持ち、活動に取り組んでいます。1つ目は、このプロジェクトは1,000年プロジェクトであって、短期的なプロジェクトではないこと。2つ目は、現在、約40カ国150以上のパートナーが参加しているプロジェクトの参加国をもっと増やすこと。3つ目は、広島だけでなく長崎にも存在する被爆樹木の種、苗木も送れるようにすること。そして4つ目は、この被爆樹木を記録したリストに、今も紛争が続いている国で、戦禍を免れた木を加え、平和の象徴として記録していくことです。

被爆から80年が経ち、昨今は異常気象も多く、被爆樹木も倒木等の恐れが懸念されていますが、ナスリーンさんらは変わらず、被爆樹木の種と苗木を世界各国へ送る活動を継続するつもりです。「ニューヨークのセントラルパーク、ロンドンのハイドパークのように人々にとってその存在が当たり前であるのと同じように、原爆の惨禍を生き抜き、今なお青々とした緑を彩る被爆樹木をルーツに持つ木々も、当たり前のように存在し続けるべきです。しかしその存在価値をどう感じるかは、そのまちに暮らす人の気持ち次第、考え方次第でもあります。被爆樹木は、紛争が絶えない世界に平和を訴える象徴として、強いメッセージ性を持つ存在だと考えています」。

UNITAR広島事務所退任後、特別上級顧問を令和5年3月末まで務め、現在は、アメリカの家族のもとと広島を行き来するナスリーンさんですが、広島は第二の故郷との思いから、広島を拠点としてグリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブとしての活動を続けています。

被爆樹木が持つたくましく生きる自然の力を、平和のメッセージに置き換え、継続して発信し続けるナスリーンさんたちの思いが詰まった活動は、世界に届く大きな力であると感じました。

らしっく contents

Vol.73
冬紅葉号
2025.11

特集

01 被爆80年 ヒロシマの記憶 未来へつなぐメッセージ

▶ グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアティブ



ボランティアも参加した被爆樹木の種取りの様子(令和6年)

▶ 特定非営利活動法人HPS国際ボランティア



「第39回広島市民平和の集い」で講演する佐藤さん(令和7年6月)

▶ ひろしま音読の会



戦後80年「へいわってすてきだね」と題した発表会(令和7年春公演)

05 らしっくレポート ひろ記者が行く

▶ 被爆痕跡を巡りデジタル地図を作成することで記憶を伝承

らしっくコラム

▶ 海外の視点から見た被爆80年
広島市立大学広島平和研究所 准教授 孫 賢鎮

06 ようこそ! 公民館へ

▶ 安佐北区内公民館

07 人材バンク 名人 宝人 達人

▶ 浅尾 哲三さん
▶ 古山 昌子さん

09 Hm助成支援団体のご紹介

▶ せんだまちアートプロジェクト実行委員会
▶ 7 hours club
▶ CROSS BUILD

11 情報の森

15 プラザ通信

祈る平和から創る平和へ 次世代とともに紡ぐ継承の日々

特定非営利活動法人HPS国際ボランティア

<https://hps.cx/>



がむしゃらに生き抜いた80年 平和を願う思いは募るばかり

「祈る平和から創る平和へ」をスローガンに平成17年に設立した「特定非営利活動法人HPS国際ボランティア」。広島生まれの被爆者、佐藤廣枝さんが代表を務めます。平和を祈るだけではなく、自ら考え、行動に移し、仲間と共に創りあげていく平和を目指し日々活動を行っています。

「原爆投下時、母と疎開していたため命拾いしたものの、兄が学徒動員だったため、原爆の犠牲になりました。母と一緒に兄を探しに何日も歩き回ったんですよ。母の悲痛な表情が今でもはっきりと脳裏に焼き付いています」と話す佐藤さん。戦後の混乱の中、生活のため、さまざまな仕事に就き、がむしゃらに生きて事業を成功させるまでになり「この広島に恩返ししたい」と平和活動に目覚めたと言います。原爆が投下され、灰のままと化した後、復興した広島。今では国際文化平和都市として、平和の象徴ともいえる広島で活動することの尊さに賛同した多くの人が、佐藤さんとともに平和活動を行っています。

平和の継承 若者が考える「今、何ができるのか」

主な活動は、毎月第2日曜日の午前10時から実施している、平和記念公園の清掃や、県内15校の高校生と作る平和教材の制作、学生による平和記念公園内の碑巡りガイドなど。毎年元旦に行われる「一人一輪千人献花」では、千本の花を用意し、平和記念公園に来る人に一本ずつ手渡し、慰霊碑に花を手向けても



▲ 学生たちによる平和教材制作の様子

らっています。また、旧日本銀行広島支店にて「広島市民平和の集い」を毎年開催しています。

「学生たちには考えることを意識してほしいので、基本的には主体性に任せています。私たちは少しのヒントを与えるだけ。平和教材の制作や平和ガイドなど、人と触れ合いながら肌で感じたことを可視化してほしい。しっかり考えて、情熱を持ち、取り組んでもらえたら」と若者たちに期待を寄せます。

「今からは継承していくことが重要だと思い、後継者の育成にも力を入れています。未来ある若者に託す準備はできました。戦争を知らない子どもたちでも、本当に素直に受け入れてくれます」と佐藤さん。

被爆80年を迎え、平和のバトンを次のランナーへ。私たち一人ひとりが受け取らなければならない事だと感じました。



▲ 元旦に行われる一人一輪千人献花の様子



▲ 学生たちと制作した「ヒロシマの心」

被爆の惨状を綴った原爆詩や体験記を 声に出して伝え“ヒロシマ”を紡ぐ

ひろしま音読の会

YouTubeチャンネル <https://www.youtube.com/@ひろしま音読の会>



言葉を声に出し日本語の美しい響きを伝える そして“ヒロシマ”を声に出して継承していく

被爆者自らが、原爆が落とされてからの日々を思い出して紡いだ言葉を声に出して読むことで「戦争や核兵器のない世界を築くための輪を広げたい」と願い、平成12年に広島の放送局に勤めていた元アナウンサー 3人が「ひろしま音読の会」を結成しました。以後、メンバーの増減を繰り返しながらも活動を続け、現在は元アナウンサー、演劇経験者など12人が在籍。今年25年の節目の年を迎えました。

「言葉を声に出して丁寧に、日本語が持つ美しい響きを伝えるとともに、“ヒロシマ”を声に出して継承していきたいんです」と、現在、会の代表を務める佐藤佳砂さん。原爆詩、そして被爆者自らが残した体験記を読むことで、言葉から伝わる力が、聞く人の想像力をかきたてるといいます。

また事務局の中丸可陽さんは「私たち自身、それまで資料を通して知識として知っていたことも、被爆者の体験記を読むことで、新たな発見があります。また過去に読んだ作品も、数年後に改めて読み直すと、当時とは違った感情を抱くこともあります。昔は点と点にしか感じなかったことが、時を経て一本の線につながった…そんな発見もあります」と話してくれました。

活動は大きく分けて春（2月または3月）と夏（7月または8月）の公演。春はヒロシマには特化せず数ある文学作品の中からテーマを絞った発表会を、夏は、原爆や平和に関する詩、体験記、文学作品を取り上げた公演を行っています。その発表に向けて、毎月2～4回ゆいぽーと（中区）での練習も行っています。

「長年続けてきた活動ですが、コロナ禍は、朗読の要でもある声を出すことが制限されて、会の存続に関わる大変な時期でした。人を集めて顔を合わせて発声することができない、一体どうしたら良いのか。メンバーで考え抜き、自分たちでYouTubeチャンネルを立ち上げ、朗読の様子を収録し発信することにしました」と佐藤さん。コロナ禍が終息し公演が再開した今も、当時始めたYouTubeチャンネルは残し、会の普及に一役買っています。

全国でヒロシマの被爆体験記を朗読 平和を願う気持ちを伝えていく

平成16年からは、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（中区）が行った、ボランティアによる日本語と英語の被爆体験記の朗読会の立ち上げに参画。現在も会のメンバー複数が参加してい

ます。「会の活動とはまた違い、要望のある全国に朗読で出向くこともあり、各地で反響をいただいています。こちらもち立ち上げから20年近く続き、きっかけを作ったこと、そして今も続いていることについて、私たちの大きな誇りにもなっています」と中丸さん。

コツコツと積み重ね、25年間続いている活動について「原爆詩や体験記を、声に出して伝える朗読を通して、平和を願う気持ちを伝えることは、広島で生まれ育った、喋り手としての使命じゃないか、そう感じています。個人では難しいことも、朗読が好きな仲間が集まることで可能になって、同じステージに立ち続けられることに喜びを感じています」とは、平成17年から活動している鈴木弘子さん。

長年行ってきた、戦争・被爆の悲惨さを綴った原爆詩、体験記を声に出して読み、伝える活動は、これからもずっと伝えていかないといけないという責任を感じており、今後は若い世代も巻き込んでいきたいと考えているそうです。経験に裏打ちされた確かな技術を持ち、言葉が持つ力を信じて活動する皆さんに、大きなエネルギーを感じました。



▲ 大田洋子と原民喜の作品を取り上げ朗読（令和7年夏公演）